

Title	福田博士著 暗雲録
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.2 (1921. 2) ,p.307(151)- 310(154)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210201-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

學ばざる所である。」と述べ其の研究法を明示された。然るに其の結果たる本書は事實の叙述よりも其の存在に對する評價の方が多くなつたのである。然し乍ら歴史は價值判断ではない。ある事柄を評價するのと價值に關係 (Beziehung) させるとは區別しなければならぬ。歴史には後者が必要であるが、前者は無用である。然しこゝで斯の如きことを詳論する餘裕はない。唯其の發達の蹤を辿り、其の大綱を捉へんとする博士の歴史研究法が博士自身の示すところに依れば單に事柄の評價に偏することを意味するやうになり、會々本書の題名に相應しからずと思ふ許りである。最後に横井時冬氏の日本商業史の一節と對比して更に本書の内容を明かにして置く。本書の特長も短所もすべて此の點に存すると思ふからである。

「……飛脚制度を設け、毎月數回定期若くは

臨時の郵便を仕立て、封書、金錢、小荷物等の運送を爲さしむる等の設備皆大に整頓し居ると同時に、其の驛務の責任に當る各驛に對しては、種々の待遇法を定め、五街道各驛の田租は全く之を免除したる上に、更らに又飼馬の地若干宛を給し、又繼飛脚給米及問屋給米など云へるものを支給し、其他名主には役料を付し、宿手代にも亦相當の手當を與へ、渡津の渡子には宅地俵米などを支給するの制を定め、(瀧本氏二六六頁。比較的事實の叙述多き部分)

「初元和元年大阪城定番の諸士東海道各驛の驛長と議し其家隸を以て飛脚となし毎月三度八日を限りて東海道を往復す人呼びて三度飛脚といふこれを三都定飛脚の濫觴とす其後大阪の商沽等これに倣ひ飛脚を以て業となす者ありしと雖も皆其名を大阪在番諸士の下卒に藉り其法被を服し雙刀を帯びて路次の賊難に備ふ。この法

を營むこと二十餘年つひに寛文三年に至り三都商沽等相議し新に町飛脚問屋拘宰領と稱して始めて買人の旅裝をなす當時大阪飛脚の江戸に着するや各其旅亭の戸外に於いて筵席を敷き書狀及貨物を排列して路人の縦覽に供す若し自己の姓名を認る者あれば飛脚に乞うてこれを領し且其歸便を問ひて復書を授ずるを常とす。」(横井氏一八九頁)(野村兼太郎)

福田博士著 暗 雲 錄

四六版四二五頁大體閣發行
定價金三圓四十錢

暫く書齋を出で、當面現實の問題に逢着したる福田博士は、世界大戰の終局と共に、再び書齋の人と爲れり。博士の名が近來市井の講演會と坊間の諸雜誌とに現るゝこと極めて稀れなるに至れるは、即ち博士が其の専門の研究に没頭しつゝあるの證左にして、吾人は博士が沈黙

裡に却つて學界を震撼す可き強烈なる研究の響を聞かんとするものなり。本書は一昨年六月を以て上梓せられたる「黎明録」の續編として、實際問題に觸接すること多き十六篇を収録せるものなり。「黎明録」と共に永く往年の著者を傳ふ可き好個の紀念たるなり。

博士が本篇中に於ける所論は幾多の方面に亘れりと雖も、其の主張の眼目は、不當なる所有の專制より、創造の衝動を解放し、所有の闇黒世界より、創造の光明世界に移らんとするに在り。而して其の手段として虚偽のデモクラシーを排して、真正のデモクラシーを唱道せんとするなり。此點に於て博士の眞意を知らんとする者は特に「如何に改造するか」「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ」及び「解放の社會政策」等を參讀せらる可し。

されど吾人の如き一學究に取りて殊に興味豊

かなるものは、

教會政治の中に於けるデモクラシーの考が途中で流産してしまつた。それが後に國家の仕組の上に於て、政治上のデモクラシーといふ思想となり、又た實際の政治上の主權を爲つて發達したものである(一六六頁)。

ことを論證せんとしたるものなり。然るに這般の研究を公にせる「エホバとカイゼル」は餘りに粗大なる構圖のみに止り、稍や詳細なる説明を聞かんことを期待せる「エホバとカイゼル」より「解放」は唯だ其の緒論として片鱗を示したるに過ぎず、吾人は博士によりて、「全世界の大問題たる基督再臨問題と國際聯盟問題との生れ出でたる本源を」(二〇八頁)吾人の眼前に明白に展開せしめらるゝの機會を得ざりしを深く遺憾とするなり。尙ほ、ルーテルを以て「私をして言はしむれば、彼は俗物であります」(一九二頁)と爲せるは、吾人の意見を以てすれば、甚だしく酷に過ぐるものと云はざるを得ず。ルーテル

が宗教の名に於て蜂起するを非議したるは、正さに宗教改革の遂行したる感覺と精神との混亂排除より來る當然の結果なり。先づ第一にルーテルを支配したるものは「不死の靈魂の幸福と基督的眞理の救濟」なりしことを記憶せざる可らず。

博士のトルストイ觀にも亦た不滿なる人多かる可しと信ず(三頁、一二四頁)。文學に志す現代日本青年の經過す可き學歴中に於て宛も「中學校」に相當すると稱せらる武者小路實篤氏(「人間」大正八年六月號所載久米正雄氏稿「人間雜誌」參照)の雜稿中に

ある馬鹿經濟學者はトルストイの云つたことを根據のない臆言と云つた。恥ぢよ、恥ぢよ。そんなことを云ふのを恥ぢよ。お前はあまりに經濟學者かも知れないが、それだけ人間から遠ざかつたことに氣がつけ、そして赫然とせよ。それが出來なければ救はれない。人間の木心から出る言葉が、空だ。そんなことを云ふのは人間を侮辱したものだぞ。(改造

大正八年七月號所 同氏稿「へんな原稿」。

云々であるは恐らく博士を指して言へるものなる可し。トルストイ論の是非は姑く措く。平常善く罵り、善く戦ふ博士が、此の人間が人間に對して發し得る最毒惡なる言語に對して、何等酬ゆる所あらざりしは、蓋し大學教授は「中學校」教師と争ふを好まずとなせるものか。され、一般讀者をして痛快を叫ばしむるものは篇中到處に遭遇する其の辛辣なる皮肉と痛烈なる罵倒と巧妙なる比喻となる可し。今、其の一例を擧ぐれば

吉野博士の例に倣へば、或る人が鼻を口と呼ぶ。其れは間違つて居るを申すと、否、己れは昔から鼻のことを口と名づけて居つた、鼻と云はうが口と云はうが人々の勝手であること云ふやうな話であります。(三八頁)。

右の綱領や共産宣言が存在して居る限り、室伏發行、吉野裏書、福田宛の此の手形は甚だ御氣の毒乍ら不渡處分をする外はありません(四二頁)。

併し世界は熟柿主義者計りではありません、生の柿を樽に

入れて早くうならせ度い人が澤山ある、そこで社會民主主義の運動が起るのである、つまり社會民主主義は樽柿主義であります(四六頁)。

河上博士の「貧乏物語」は貧乏人、若しくは其の候補者に讀まれたものであつて金持ちにはあまり讀まれて居い書物であります(四二頁)。

講和條約の會議に於ては西園寺さんが唯々味曾を付けたとけに止まつた。然るに華盛頓の會議に於ては、鎌田さんが臍の緒(治安警察法第十七條)をプツ下げて行かれて、世界中の人々に此の臍で茶を沸かさせようとしつゝあるのではないか。秀吉は、軍中大茶の湯を催したとて、古來より其の風流を稱へられました、鎌田さんは、世界大戰の終局を期として、世界中の人を集めて、臍茶の湯の大會を米國華盛頓で開かれるのであります(四一六頁)。

と言へるが如し。然れども吾人をして案を拍つて快哉を叫ばしむるものは、寧ろ此の種の言語よりも、

又た西伯利に行つて居る軍隊が過激派の思想に感^かれて來るといふ事を心配して居る者もあるが、ソナ事は恐くない、然し乍ら之れに經濟的の、即ち經濟上の實際上の力が加はるといふことは恐い。さうなれば實に危險である。日本が侵略的經濟主義を執るやうになるに國內に於て必ず之れ

に拮抗す可き經濟上の力が起る(三一七頁)。
 「如何に労働者を指導す可きか」と云ふ問題に對して一言を以て答ふるならば、「労働者自ら指導す可き者である、他の階級から強ひて指導すると云ふことは無用にして、且つ或ひは有害と爲る恐れがある」と答ふる外はない(三四七頁)。
 と斷するが如き博士の態度なり。曩きに博士が専門の研究に復歸せるを慶賀せる吾人は、又た此くの如き會心の文字に接する毎に、博士を當面現實の論壇より失へる損害を思ふこと切なり。(高橋誠一郎)

慶應義塾大學 社會問題講演

菊版四五〇頁國文堂發行
 定價金貳圓五十錢

大正九年八月二日より同十日に亘り、慶應義塾大學に於て開催せられたる夏季講演會の速記録に講演者自身の嚴密なる校訂を加へて出版したるものにして、堀江博士の「労働組合の現在及び將來」、高橋教授の「經濟思想史上より觀た

る財産制度」、小泉教授の「歐洲社會運動大略」、三邊教授の「失業問題」及び瀧本博士の「徳川時代の經濟」より成れり。

前號(第十五卷) 目次(大正十年一月號)

論 說

- ◎銀價騰貴時代の印度通貨問題 堀江 歸一
 - ◎アリストテレスの貨殖論 高橋誠一郎
 - ◎ロオドベルトスの經濟學說補遺(一)小泉 信三
 - ◎外國領海内に於ける商船の地位に關する佛國主義(上) 板倉 卓造
 - ◎現代中國學者間に於ける井田論の研究(上) 李 永 霖
 - ◎親族關係と社會組織(上) 野村兼太郎
 - ◎アーサー・ペンティの歴史觀(一) 加田 哲二
 - ◎ギルドの起原に就いて 園 乾 治
 - ◎生存權と自殺權 高橋誠一郎
- 新刊紹介
- ◎M. Beer: A History of British Socialism. Vol. I 野村兼太郎
 - ◎M. Beer: A History of British Socialism. Vol. II 加田 哲二
 - ◎小島昌太郎著「海運經濟論」第一卷 増井 幸雄
 - ◎中川正左著「鐵道論」 増井 幸雄

一冊定價金五拾錢
 半年分金貳圓九拾錢
 一年分金五圓四拾錢
 郵税金壹錢五厘
 郵 稅 共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
 ●營業に關する用件は發賣元宛
 ●原稿締切期日は發行の前月十日限
 大正十年一月廿一日印刷納本
 大正十年二月一日發行
 每月一回一日發行

三田學會雜誌
 第五十卷
 第二號
 編輯者 江 田 範 保
 發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
 印刷者 金子 鐵 五 郎
 印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
 金子 活 版 所

發賣元 國 文 堂 書 店
 東京市芝區三田貳丁目壹番地
 電話高輪一三七番
 振替東京四六九四九番
 尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會